

「生活日本語」の教科書分析

—学習メカニズムの観点から—

平山紫帆 (立教大学)

高橋雅子 (立教大学)

Analysis of “Survival Japanese” Textbooks: From Learning Mechanism Perspective

Shiho HIRAYAMA (Rikkyo University)

Masako TAKAHASHI (Rikkyo University)

キーワード： 生活日本語, 教科書分析, 学習メカニズム

Keywords : survival Japanese, text-analysis, learning mechanism

SUMMARY

To find out whether available “Survival Japanese” textbooks are suitable for “foreign students who do not need the language to earn credits,” we choose five textbooks and analyze (1) whether they are effective in learning mechanism terms and (2) what kinds of topics, settings and functions they deal with. It has been found most are insufficient in learning mechanism terms and unsuitable for such students because they include no college life-related topics or settings.

1. はじめに

文部科学省が2008年に策定した「留学生30万人計画」は、日本の「グローバル戦略」の一環として2020年までに日本に受け入れる外国人留学生を30万人に増やすという計画である。この計画は、留学生を引きつける魅力ある大学づくりの一環として、英語のみで学位取得が可能なコースの設置を奨励しており（文部科学省2008）、現に立教大学をはじめとした様々な大学で、英語のみによる単位取得が可能なコースが次々に誕生している。その結果、来日前も、来日後も日本語を学習することなく、日本での留学を終えるということが可能な状況が生まれている。

だが、「単位取得上日本語が不要」ということは、「留学生活で日本語が不要」ということと同義なのであろうか。たとえ講義を受けたり、ゼミで発表したり、試験を受けたりとといった単位取得に必要な部分で日本語が不要であっても、教師や友人との交流において、また、買い物をしたり交通機関を利用したりするといった日常生活で日本語を必要とする人は多いのではないだろうか。

そうであるならば、留学生を受け入れる大学と日本語教育は、こうした声に応える必要があると思われるが、ここで求められている日本語は、初級から文法や文型を積み上げる体系的な日本語というよりは、むしろ、大学生活や日常生活に根差した「生活のための日本語＝生活日本語」であろうし、短期間で学習できてすぐに実践できる、即戦力となる日本語なのではないだろうか。

そこで本稿では、既存の「生活日本語」の教科書の分析を通し、以下の2点について明らかにすることを目的とする。

- 1) 既存の教科書は、学習メカニズムの観点から見た場合に、効果的なものになっているか。
- 2) 既存の教科書ではどのような話題・場面・機能が扱われているか。それは留学生にどの程度適用可能なのか。

2. 生活日本語とは

1では、便宜上「生活に必要な日本語＝生活日本語」としたが、「生活日本語」とはどのようなものであるのだろうか。

これまでの先行研究では、同様の事象を扱っていてもその名称には様々なものがあり、十分な定義がなく使用されている場合も多い。

表1 生活日本語の名称・定義

	名称	定義
鹿嶋(2005)	サバイバル・ジャパニーズ	日本で生活する際に、コミュニケーションのために最低限必要な知識および言語として、短期的に教えられたり、使用されたりする日本語
永井(2005)	生活日本語	明確な定義なし（サバイバルのための日本語）
林(2011)	サバイバル日本語	明確な定義なし（生活に必要な日本語）
平山(2013)	サバイバル日本語	日本滞在中に必要となる最低限の日本語

本稿では、鹿嶋(2005)にならい、「日本での日常生活において最低限必要となる日本語で、実践のコミュニケーションを重視した日本語」と定義する。

3. 分析方法

3.1 分析対象

本稿では以下の5冊を分析の対象とする（表2）。

表2 分析する教科書

	タイトル	本稿での略称	著者/監修者	出版社
1	『にほんごこれだけ！1』	『これだけ』	庵功雄 監修	ココ出版
2	『にほんご宝船』	『宝船』	春原憲一郎 監修	アスク出版

3	『Nihongo Fun&Easy!』	『Fun&Easy』	緒方由希子、他	アスク出版
4	『Nihongo Breakthrough』	『Breakthrough』	JAL アカデミー	アスク出版
5	『ニューエクスプレス 日本語 Japanese』	『エクスプレス』	刈田カイ 他	白水社

これらを対象として選定した理由は、①初級が対象で、②短期養成に適し、③日常生活での場面や話題を想定しており、④コミュニケーションを重視し、⑤実践の使用を意識したものであるため、「生活日本語」の習得を想定したものと判断できるからである。

3.2 教科書の特徴

各教科書の全体的な特徴は以下の通りである。

表3 対象教科書の特徴

		『これだけ』	『宝船』	『Fun&Easy』	『Breakthrough』	『エクスプレス』
基本情報	対象者	地域日本語教室で学ぶ人（ゼロ初級～）	日本の地域社会での生活者（初級程度）	日本語の知識が全くない人～初級前半程度	ビジネスパーソン、家族（ゼロ初級）	ゼロ初級
	シラバス	話題	話題	話題、場面、機能	場面、機能	文法、場面
	媒介語	なし。タイトルと「活動用下敷き」の重要語句と文法には4言語の訳付	なし	英語	英語	英語
	学習時間	20~40分/課	記載なし	20~30時間	30~40時間	記載なし
表記	表記	仮名、ローマ字	漢字仮名交じり文	漢字仮名交じり文	ローマ字。一部仮名あり（ダイアログ）	ローマ字。一部仮名あり（ダイアログ）
	分かち書き	あり	なし	なし	あり	あり
	ルビ	(なし)	なし	あり	(なし)	(なし)
体裁	書き込み	あり	あり	なし	あり	一部あり
	索引	あり	なし	なし	あり	あり

	付録	活動用下敷き	なし	CD、別冊	CD、別冊	CD
	副教材等	なし	教師用活動集	なし	なし	なし

3.3 分析項目

3.3.1 各課の構成

まずは教科書の1課の構成を分析する。分析の基準には、ガニエの「9教授事象」を採用する。

教材は学習者の学習を支援するものであり、学習者の学びのメカニズムに即したものになっていることが重要とされている。そうした観点から教材を分析する際に有効な拠り所となるのが、ガニエの「9教授事象」である。学習心理学者であるガニエは、人間の学習モデルを反映させて教材を組み立て、説明を工夫すれば、効果的な教材が作れると考えた。そして、授業や教材を構成している一つ一つの指導の過程を「学びを支援するための外側からの働きかけ（外的条件）」と捉え、9種類に分類し、これを「9教授事象」と名付けた（ガニエ,1986; 鈴木,2002）。これは、教材の構成を人の学びのプロセスにさかのぼって考えるための枠組みであり（鈴木,2002,p79）、教材を分析する際にも有効な手法とされている。そこで本稿でもこの「9教授事象」に基づき、既存の教科書の各課の構成を分析する。

表4 ガニエの「9教授事象」（ガニエ,1986、鈴木,2002、国際交流基金,2008より作成）

	ガニエの「9教授事象」	主な方法
1	学習者の注意を喚起する	学習者の興味に訴える、写真や絵を使って例を見せる、学習者に質問して学習者の経験・背景知識と内容を関連付ける 等
2	授業の目標を知らせる	目標を学習者に具体的に知らせる（「特技」について話したり聞いたりできる、等）
3	前提条件を思い出させる	以前に学習した語彙や文型を思い出し、必要に応じて練習する
4	新しい事項を提示する	新しい項目を提示し、例を示す
5	学習の指針を与える	形の作り方や意味に気づかせる、他項目との比較で同じ所、違う所を考えさせる 等
6	練習の機会をつくる	CDを聞いて質問する、文を作る、インタビューする、会話練習をする、等
7	フィードバックを与える	答えを確認する、間違いを訂正する、感想を述べ合う 等
8	学習の成果を評価する	事後テストを行う、短い文章を書かせたり口頭発表をさせたりして評価する、等

9	保持と転移を高める	時間をおいたあとに語彙や文型の復習をする、総合的な活動をする、次に続く学習の予告をする 等
---	-----------	---

3.3.2 共通する話題・場面・機能

今回の調査で分析対象としている教科書は、シラバスや対象者に違いがあるものの、そこには類似した話題や場面、機能が散見される。そこで、対象の教科書に共通して現れる話題・場面・機能を取りだし、「どのような話題・場面・機能が『生活日本語』の教科書で扱われやすいのか」、また、「留学生の日常生活でも必要か」「実践的か」について分析を行う。

4. 分析と考察

4.1 各課の分析

ガニエの「9 教授事象」に基づく分析結果を稿末の資料に示す。以下では、それぞれの教授事象について、分析と考察を行う。

①学習者の注意を喚起する

今回の対象教科書のうち、注意喚起の方法と解釈できたのは、(1)タイトルの工夫、(2)学習者への質問、の2種類であった。

まず、『これだけ』、『宝船』、『Fun&Easy』では、タイトルが「おなかがすきました」(『これだけ』1課)「わたしの家族をしょうかいします！」(『宝船』6話)、「How much is this? これ、いくらですか。」(『Fun&Easy』Unit3)等の、課の内容を反映させたものになっている。ここに学習者の興味を引こうとする意図が読み取れるが、教材から学習者への働きかけの度合いは強いとは言いきれない。

一方、『宝船』は、たとえば「好きなテレビ番組」が話題の課(14話)では、「一日にどれくらいテレビを見る?好きなテレビ番組について話してみよう」といった、導入のための具体的な質問が示されている。今回対象とした教科書で、このような学習者への積極的な働きかけがあったのは『宝船』のみであった。もちろん、教材になくとも、教師が授業を行う際には学習者の注意を喚起する活動を行うのが一般的であると思われるが、学習開始段階で学習者に興味を起こさせ、モチベーションを高めることの重要性を鑑みれば、学習者と内容を強く結びつけるための項目を教材に明記しておくことは有効であろう。

②目標を知らせる

学習の目的を予め知らせると、学習者が学習内容に集中しやすくなる。また、何を学習するのかを具体的に知ることにより、学習意欲や期待感が高まり、頭の働きが活発化することも期待できる(鈴木, 2002)。

今回分析した教科書の中で、学習目標を明示している教材は、『Fun&Easy』と『エクスプレス』であった。『エクスプレス』は「You will learn numbers」(2課)のように、その課で学習する内容が示されている。一方『Fun&Easy』は、各課の表紙にその課の目

標が大きく書かれており、学習者にも目標が一目瞭然になっている。ただし、どちらも一部抽象的な書き方（たとえば「Use Simple sentences to ask for permission」『Fun&Easy』Unit5）も見られる。学習者の日常に即した目標を具体的に提示したほうが、学習者が目標を明確に把握できるであろう。

他方、目標自体が明記されているわけではないが、『Breakthrough』は、課の冒頭にダイアログが提示してあるため、それを読めば、ある程度その課の目標を予測することが可能である。だが、ダイアログのみで学習者自身が学習目標を推察することは難しいものと思われる。

③前提条件を思い出させる

新しい事項を学習する際、それを既有知識や経験、技能に結び付けられるように、これまでの学習内容を思い出させるのがこの段階である。

しかし、今回対象とした教科書では、前提条件を想起させるような項目は認められなかった。これは、分析した教科書の大半が非積み上げ式で、当該課より前の課の学習を前提にしていないことも関係しているのかもしれない。

④新しい事項を提示する

文法事項の提示については、「学習項目」を提示してからその例を見せるもの（『Fun&Easy』）、ダイアログを出してから学習項目を提示するもの（『Breakthrough』『エクスプレス』）、学習項目を吹き出しで示すもの（『これだけ』）、文法事項を提示しないもの（『宝船』）がある。明示されているもののうち、特に『Fun&Easy』は、一度に提示される項目が一つだけで、それに続く会話例も、2人が1発話ずつしかしない短いやりとりであるため、何が学習すべき項目なのかが極めてわかりやすい。

語彙の提示については、練習のキューとして絵と共に提示するもの（『これだけ』、『Fun&Easy』）、課の冒頭にリストを提示するもの（『宝船』）、ページ下部に語彙リストとして提示するもの（『Breakthrough』『エクスプレス』）がある。語彙リストでの提示は、学習する語彙をまとめて提示することが可能ではあるが、性質がイメージしにくい語彙や、品詞が異なる語彙もまとめて提示されてしまうため、練習の際に使いにくいというデメリットもあると思われる。生活日本語の実践という観点から考えると、語彙を記憶しやすい形で提示することが必要であろうが、『これだけ』のようにインパクトのある絵で語彙を提示する方法は、絵で示せる語彙に関しては有用であると思われる。

⑤学習の指針を与える

文法に関しては、文法説明や、関連項目との比較という方法が考えられるが、話題シラバスの教科書（『これだけ』『宝船』）には、文法説明が見られなかった。文法説明があるものについては、一つ一つの項目ごとに文法説明があるもの（『Fun&Easy』）、1課分をまとめて説明するもの（『Breakthrough』『エクスプレス』）があった。また、巻末に詳しい文法説明がついているものもあった（『Fun&Easy』）。

また、今回対象とした教科書のうち、『Fun&Easy』と『Breakthrough』では、新しい

文法項目が他の課の項目と関連がある場合にその違いの説明がなされたり、それを参照できるように課の番号が示されたりしている。しかし、『Breakthrough』では、関連のある2項目のうち、先に出てきた項目には参照番号がついているのに後ろの項目には参照番号がなく、既に学習したものを思い出すことが難しくなっている等の問題も見られた。

鈴木(2002)は、学習者に対し、「意味のある形で覚えられるような助言」を与えることの重要性を指摘しているが、そのためにも、文法項目の説明や他の項目との違いに関する説明は必要であろう。特に、学習者が成人になってから外国語を学ぶ場合、体系的な説明が必要だと思われる。

⑥練習の機会をつくる

今回分析したすべての教科書に、「練習の機会」が提供されていた。話題シラバスの教科書(『これだけ』『宝船』)には、自分の話をしたり、相手の話を聞き出したりする等、その話題について会話ができるようになるための活動が準備されていた。『これだけ』には、文型を使った短いやり取りの練習もあるが、パターンプラクティスではなく、あくまで自分について話すことが意図されている。つまり、これらの2冊は、「正確に話す」ことよりは、「楽しんでたくさん話す」ことを重視していると言える。

一方、その他の教科書(『Fun&Easy』『Breakthrough』『エクスプレス』)では、まず学習項目を使ったパターン練習がある。そして、『Fun&Easy』では、短いやり取りの談話練習が続く。『Fun&Easy』と『Breakthrough』には聴解やロールプレイ等様々な練習が用意されている。

⑦フィードバックを与える

話題シラバスの教科書(『これだけ』『宝船』)には、フィードバックにあたるものは見られなかったが、その他の教科書には練習問題の解答があり、学習者が自分の答えのフィードバックを受けられるようになっている。

また、「学習者の実行の正確さ、あるいはその正確さの程度」(ガニエ, 1986)を知らせるのがフィードバックであると考えると、聴解のスク립トや、スク립トの訳等もフィードバックとみなすことができると思われるが、そうしたフィードバックは、『Fun&Easy』と『Breakthrough』に見られた。

一方、フィードバックを行っていた3冊の教科書にも、会話練習に関するフィードバックは見られなかった。ロールプレイや会話は「正解」があるわけではないので、フィードバックを教科書に載せるのは難しい面もあるが、例としてモデル会話を示す方法もあるのではないかと思われる。

⑧学習の成果を評価する

『Fun&Easy』では、課の最後に到達度チェックを行うコーナーがあり、その課の目標が達成できたかを自己評価することができる。今回分析した教科書のうち、評価に関する項目が見られたのはこの1冊のみであった。ツォグタラフ(2007)が、目標達成による達成感が学習意欲の向上につながると述べているように、学習者に達成感を持たせ、

更なる意欲を高めるために、学習者自身、もしくは他の学習者や教師が学習成果を評価できるような工夫が必要である。

⑨保持と転移を高める

まず、『これだけ』には課の最後に学習した文型を自分でまとめるコーナーがある。そして『Fun&Easy』には、学習したフレーズや表現のまとめがあり、確認できるようになっている。こうしたまとめの活動は、学習内容を保持する上で重要なことだと思われる。ただし、いずれも同じ課の中での復習であり、複数の課をまとめた復習は見られない。より長く保持させるために、時間をおいてから再度復習する機会があるとよいと思われる。また、現実世界では、「駅で電車の時間を尋ねてから切符を予約する」等、様々なことが複合的に行われることも多い。したがって、復習時に異なる課の場面や機能を組み合わせた「総合練習」を組み込むことは、保持だけでなく転移も促進することになり、学習したことを実践につなげるために有効であると思われる。

また、『これだけ』では、学習した文型がそれ以降の課で複数回出てくるようになっていてと説明されている(p7)が、このように学習した項目を異なる場面や話題で繰り返し使うというのも、保持と転移という面で効果的であると思われる。

4.2 共通する話題・場面・機能

(1) 話題

今回分析した5冊の教科書のうち、2冊以上で扱われている話題を表5に示す。

表5 教科書で扱われる話題

話題	具体的な内容	『これだけ』	『宝船』	『Fun & Easy』	『Breakthrough』	『エクスプレス』
自己紹介	名前、出身地	○	○	○	○	○
予定・行動	予定、一日の行動、休日の行動	○	○	○	○	○
過去の行動	今朝の行動、休日の行動、旅行での行動	○	○	○	○	○
感想	生活、旅行、食べ物、日本食、映画、家、仕事、ファッション、店等の感想	○	○	○	○	○
好きな物、趣味	食べ物、飲み物、スポーツ、映画	○	○	○	○	○
旅行	訪れた場所、時期、感想	○	○	○	○	
希望	休日にしたいこと、ほしい物	○	○	○		○
道順	目的地までの行き方		○	○	○	○

仕事	自分の仕事、忙しさ	○	○	○		
体調	最近の体調、病気の時の対応	○	○			
経験	行ったことがあるか		○	○		○
能力	飲める量、子どもの能力	○	○			○
気候	最近の気候	○		○	○	
家族	家族構成、家族の紹介	○	○			
食事	味、食べられないもの	○		○		
部屋	部屋にあるもの	○	○			
ファッション	相手のファッション、欲しい服	○	○			
ごみ	ごみの出し方	○				○

これを見ると、各教科書に共通して扱われているのは、いずれも身近な事柄であり、大半が自分自身に関する話題であることがわかる。ただしこれは初級の教科書全般に言えることであり、生活日本語に特有のこととは言えない。

次に、「留学生の日常生活でも必要か」という観点から見ると、今回分析した教科書には「自己紹介」「予定・行動」「感想」「趣味」等、留学生の生活でも必要になりそうな話題が多数含まれている一方で、留学生が多く時間を過ごす「大学」「大学生活」に関する話題や、「研究」「アルバイト」等の留学生に身近な話題は見られなかった。

(2) 場面

今回分析を行った5種類の教科書のうち、話題シラバスの2冊(『これだけ』『宝船』)では場面が確認できなかった。したがって残りの3冊(『Fun&Easy』『Breakthrough』『エクスプレス』)について分析を行った。この3冊のうち、2冊以上で確認できた場面と、それぞれの場面における会話の機能を表6に示す。

表6 教科書で扱われる場面

場面	『Fun&Easy』	『Breakthrough』	『エクスプレス』
店	○	○	○
ファストフード	○	○	○
タクシー	○	○	○
町	○	○	○
コンビニ	○	○	
レストラン	○	○	
駅	○	○	
オフィス	○	○	
パーティー	○		○
寺	○		○
スポーツクラブ	○	○	

これを見ると、日常生活の様々な場面が取り上げられているのがわかる。しかし、「留学生の日常生活」という観点から見た場合、オフィス場面は基本的に不要であろうし、タクシー場面の必要性もあまり高くないと考えられる。留学生にとっては、多くの時間を過ごす大学の場面（教室、研究室、事務、学生食堂、サークル等）や、学生寮等の方が重要だと思われるが、こうした場面が今回分析した教科書には見られなかった。

一見似ている場面であっても、たとえばレストランと学生食堂では、そこで行われる会話には違いがあることも予想される。日常生活での実践のためには、調査に基づいた留学生特有の場面設定が必要である。

(3) 機能

最後に、分析対象の教科書の複数冊で扱われていた機能と、その機能が用いられている場面を表7に示す。

表7 教科書で扱われる機能とその使用場面

機能	場面	『これだけ』	『Fun& Easy』	『Break through』	『エクスプレス』
場所を尋ねる	道、店内、受付	○	○	○	○
依頼する	タクシー、居酒屋		○	○	○
誘う	オフィス、カフェ		○	○	○
時間を尋ねる	駅、バス停、店、スポーツジム		○	○	○
注文する	レストラン、ファストフード、カフェ、電話		○	○	○
値段を尋ねる	店、駅		○	○	○
許可を得る	銀行、寺、オフィス、スポーツジム		○		○
理由を述べる	(提示なし)	○			○
行き方を尋ねる	駅、バスステーション		○	○	
断る	コンビニ		○		○

今回対象とした教科書のうち、4冊で「場所を尋ねる」が扱われていた。また、タクシーで目的地に行くよう依頼したり、食事や旅行に相手を誘ったり、店で注文したり、時間や値段を尋ねるといったことも、多くの教科書で確認できた。これらは一般的な初級の教科書では扱われることが多い項目ではあるが、生活日本語においても、こうした機能が重要だとみなされていることがわかる。

また、表7からは、同じ機能が様々な場面で使用されていることがわかる。しかし(2)で指摘した通り、大学場面の例は見られない。留学生にとっては大学は重要な場であるので、こうした機能を大学場面に適用し（「教室の場所を尋ねる」等）、実際に使えるよ

うに練習する必要がある。

5. まとめと今後の課題

以上の分析結果をまとめると、以下のようになる。

ガニエの「9 教授事象」に基づいて各課の構成を分析した結果、各教科書は「9 教授事象」の要素を部分的には備えているものの、全てを満たしているものは見られなかった。また、「④新しい事項を提示する」「⑥練習の機会をつくる」は全ての教科書で確認できたが、「③前提条件を思い出させる」ための項目がどの教科書にも見られず、また、「⑦フィードバックを与える」や「⑨保持と転移を高める」ための内容が不十分な教材が多く見られた。生活日本語の学習者が短期間で学習したことをすぐに実践に移せるようにするためには、教科書を効果的で効率的にする必要があり、そのためには学習メカニズムに沿った教材は重要であると思われる。

今回分析対象とした生活日本語の教科書では、身近な話題や、日常生活における様々な場面や機能が扱われていたが、大学に関する話題や場面設定が全く見られず、留学生の使用にとっては不十分であることが明らかになった。

しかし、留学生、特に単位取得上日本語が不要の留学生に本当に適した日本語の教科書・教材を作るためには、彼らのニーズと、彼らを取り巻く環境の調査が必要である。それを今後の課題としたい。

参考文献

- 鹿嶋恵(2005). 「初級準備段階としてのサバイバル: ジャパニーズのシラバス検討」. 『三重大学留学生センター紀要』. 7, 35-48.
- R.M.ガニエ(1986). 『カリキュラムと授業の構成』. 京都: 北大路書房
- 国際交流基金(2008). 『教材開発』. 東京: ひつじ書房
- 鈴木克明(2002). 『教材設計マニュアル- 独学を支援するために - 』. 京都: 北大路書房
- ツォグタラフ ガンツェツェグ(2007). 「モンゴルにおける日本語教育の改善: 自律学習能力を高めるために」. 『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』 2, 15-23.
- 永井智香子・守山恵子(2005). 「『生活日本語』クラスの実践の記録」. 『長崎大学留学生センター紀要』 13, 41-48.
- 林里香・佐藤尚子(2011). 「サバイバル日本語の教材開発と授業実践」. 『国際教育』 (千葉大学国際教育センター紀要) 4, 25-42.
- 平山紫帆(2013). 「教室での学習内容と実践をつなげる活動案—サバイバル日本語コースでの試み—」. 『立教大学ランゲージセンター紀要』 29, 43-50.
- 文部科学省(2008). 「『留学生30万人計画』 骨子」. 2013年11月30日検索
<http://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/rireki/2008/07/29kossi.pdf>

資料 ガニエの「9教授事象」による分析

ガニエの「9教授事象」	『これだけ』	『宝船』	『Rank&Easy』	『Breakthrough』	『エクステンズ』
1 学習者の注意を引く	タイトルが話題に対して興味を引くようなものになっている	タイトルが話題に対して興味を引くものになっている。また、タイトルの下に、興味を持たせるための導入あり	特になし	特になし	タイトルは、学習する文法項目を使用した文、ダイアログの挿絵で興味を引くことは可能。
2 目標を知らせる	「日本人参加者」に向けて、学習目標が提示されている。	特になし	扉ページで、課の目標を明示	具体的・明示的な目標提示はないが、見聞きのはじめのダイアログで学習項目が推測できる。	目標が明記されている。
3 既習項目を思い出させる	説明なし。既習項目がなくても学習可能。	説明なし。既習項目がなくても学習可能。	説明なし。既習項目がなくても学習可能。	説明なし。既習項目がなくても学習可能。	説明なし。
4 新しい学習項目を提供する	話題に必要な語彙は絵と共に提示。文型は吹き出しの中にいれて提示。1つの話題に付き、5〜6個の文型。	その話題を話す際に必要な語彙を「ことば」として冒頭に提示。(ただし、語彙の意味は学習者が調べようになっている。)表現や会話例もイラストとともに提示(「学習項目」として明示されているわけではない)。新しい文法・文型等の提示はない。	学習項目を「Phrase」として提示。ページ冒頭、囲みの中に示されている。量的には、見聞きた新しいフレーズが1つ(Unitあたり、2〜4フレーズ)。そのUnit全体で扱うフレーズを一括提示はせず、一つ一つ提示している。	ダイアログに必要な文型や表現を「Key Sentence」として1〜4個提示。(課は2〜3ダイアログ)。	冒頭のダイアログでは、新出項目が赤字で示されている。また、語彙、表現、文法についても明記されている。
5 学習方法を提示する	文型一覧は付録の下敷きに出ているが、説明はない。	文法・文型に関する説明はない。	「Phrase」の下に文法と用法に関する英語の説明あり。また、Ex.として、そのフレーズを使用した短いやり取りもある。また、巻末には文法に関する説明(文法編)があり、別冊語彙集もある。	新しい文法事項は「Grammar Notes」での説明と例文の提示あり。しかし、ダイアログなどの説明ではなく、1課分をまとめて課の最後に提示。発展学習に必要な文法事項は「Additional Grammar」として提示。付加情報として、文化に関する情報も課の最後に提示。	文法項目が提示されている箇所には文法説明と例文あり。
6 練習の機会を提供する	絵と語彙を見ながらの談話練習、「やってみましょう」、「おしやべりしましょう」で応用練習ができる。	学習者自身が話題について話しための活動が準備されている。	PracticeAでパターン練習、PracticeBで談話練習、Dialogueで複数のフレーズを使った応用練習、Listeningで聴解練習、Role playing、「Do you remember?」で確認と応用練習ができる。フレーズとダイアログの音声CDあり。	DVDではパターン練習ができる。(キーワードはすべて書かれており、読み上げるだけ) Activityでは、代入練習やRole Play、聴解練習などができる。ダイアログの音声CDあり。	2つの課が終わったあとに「Exercise」があり、変形練習、代入練習、談話練習ができる。また、ダイアログ、Expression、ExerciseにはCDもついでいて、Listeningの練習ができる(設問はなし)
7 フォードバックする	特になし	特になし	Dialogueの英訳とListeningの答えとスクリプトが巻末についている。	Activityの解答と聴解のスクリプトが巻末についている。	Exerciseの答えは、Exerciseの最後に出ている。
8 学習の成果を評価する	特になし	特になし	Unitの最後に、「Now I can!」があり、学習目標に到達できたかを自己評価できる。	特になし	特になし
9 保持と転移を高める	学習した文型を、課の最後にある「これだけ!」にまとめられるようになっている。また、学習した文型がそれ以降の課で繰り返し出てくるようになっている。	復習や確認を行う活動は特になし。	複数のフレーズを学習したUnitの最後に「Phrase for This Unit」があり、その課で学習した語彙や表現が確認できるようにになっている。しかし、いくつものUnitを総合的に復習する活動はない。	復習や確認を行う活動は特になし。	復習や確認を行う活動は特になし。